

英文の読み方を考える II

— if 節の内在する仮定法について —

平井 正朗

1. はじめに

仮定法を指導する際、直説法と仮定法の違いから説明し、その全体像を理解させたうえで、仮定法の本質にアプローチするのが一般的であるように思われる。授業展開もif型、I wish型などの仮定法過去、仮定法過去完了の“公式”提示とともに、いわゆるパターンプラクティスを通じてその定着が図られているのではなかろうか。しかし、大学入試、特に国立大学の2次試験における読解総合問題との関連で言えば、教科書や学参に出てくるような基本的な用例は理解できても実際の入試英文に直面すると、「形」を見きわめ、contextにおける「意味」を確定することができないというのが実情であるように思われる。本稿ではその事例を分析し、得点率向上に資するリーディング・スキルを提示する。

2. 事例分析

(01) A humanoid head that makes accurate facial expressions, in which every facial movement could be precisely controlled, would enable researchers to find out, in three dimensions and in real time, the purpose of specific facial muscles in communicating emotion, Smith says.

[下線部筆者、以下同様] (大阪府立大, 04)
 (スミス氏によれば、あらゆる顔の動きを正確にコントロールでき、正確な顔の表情を作る人型ロボットの頭部があれば、研究者は感情を伝える際の顔の特定の筋肉の目的を3次元で、かつリアルタイムで知ることができるだろうということである) [拙訳、以下同様]

(01)は文の主語A humanoid headに条件節が内在する事例である。このような場合、主語自体の意味が“非現実的トピック”となる可能性が高い。識別のポイントは、主節における助動詞の過去形

[would/could/might/should]があり、談話の基準となる時制が現在なら仮定法過去、過去なら仮定法過去完了を想定し、“非現実的トピック”の主語であれば「～があれば、いれば」と訳してみることである。

(02) The school itself was similarly progressive, with a new laboratory facility that could have been built as his playground. Even his musical talent drew praise. The contrast with the former school could not have been more striking.

(京都大, 04)

(学校自体も同様に進歩的なものであり、新しい実験設備を整えており、それは彼の遊び場として造られたと言ってもよいものであった。彼の音楽的才能ですら称賛を浴びた。前に通っていた学校との違いは、これ以上すばらしいものにしようとしてもそれ以上にはなり得ないものであった)

“How are you going?”に対する“Couldn't be better!”がどうして「最高です」の意味になるのか理解できていない生徒は多い。ここでは、Couldn't be better!という文全体の中に仮定条件が内在しており、「もしよくなることがあっても今以上によくなることはあり得ない」という原義から「最高です」という訳が生まれるため、〈形〉は否定でも〈意味〉は肯定になるということがマスターできていなければ誤訳につながる。なお、文全体にif節が隠れている場合、比較級を伴うことが多く、それを「目印」にすればよいが、文の命題を逆にして訳するのがコツである。(02)では、基準となる時制が過去であり、could not have beenから仮定法過去完了を想定し、more strikingを「目印」に文全体の命題を逆にして和訳すると文意が明確になる。

(03) There were few places on earth that I would rather have gone. (東京都立大, 03)

(この世に行き場があったとしても、他に行きたいと思うような場所はなかった)

(03)は関係詞節に仮定法が内在したケースであるが、このような場合、“現実部分”であるThere were few places on earthの命題を逆にして「この世に行き場があったとしても」とすれば文意が見えてくる。“受験生”を見ていると5教科7科目という科目間バランスの調整と学習ストラテジーの定着に追われているのが現状であり、英文の読解量の絶対的不足から文内部の修飾関係を確認することが精一杯で、その中に仮定法が潜在していることなど気づかないというのが“ホンネ”ではなからうか。

(04) After a few minutes, I repeat the “strengths” people have pointed out, and only then do I feel ready to ask, “Is there anything in the story that you were confused by? Any parts you felt should have been developed more or cut out? Anything you might do differently if it were your story?” (九州大, 05)

(数分後、人々が指摘した「長所」を繰り返した後、ようやく次のように尋ねることになる。「話の中に混乱させられるものはありませんか? もっと発展させる部分や削除する部分がないにしても、そうすべきだと感じる部分はありませんか? もしそれが自分の話だったら、違ったことをするのだろうか?」)

(04)はAre there any parts that you felt should have been developed more or cut out?から生まれた連鎖関係詞節の構造であり、Are thereとthatが省略されている。さらにshould have been developed more or cut outが仮定法過去完了になっており、「発展させる部分や削除する部分がなかったとしても、そうすべきだと感じる部分があったとしたら」という談話情報を含意している。連鎖関係詞節の場合、関係詞の直後の主語+〈思考〉動詞を()でくくれば、その内部構造を見分けやすくなる。

(05) There are works of art that appear to be universal, in the sense that they are

still loved and enjoyed centuries after their production. They awake instant recognition in millions throughout the world. They speak not only to their own time—the relatively small audience for whom they were originally produced—but to worlds beyond, to future generations, to a mass society connected by international communications that their creators could not suspect would ever come into being. (東京大, 04)

(生み出されてから何世紀にもわたり、まだ愛され、楽しまれているという意味で、普遍的だと思われる芸術作品がある。それらは、世界中の何百万人もの人に即座に認知される。それらは、その時代、つまり、元々、生み出された対象としての比較的少ない聴衆にだけでなく、世界を越えて、未来の世代や生み出されるとはその創作者には思いもよらなかった国際的通信網によって結ばれた大衆社会にも語りかけている)

(05)も連鎖関係詞節の構造であるが、ここではthat節内部のtheir creators could not suspect ofの文全体に仮定法が内在しており、「もし創作者が生み出されると考えたとしても思いもよらなかったような国際的な通信網によって結ばれた大衆社会」という意味である。

(06) For example, I can pick up the phone and speak to a relative on the other side of the globe, and I can see that it is indeed a globe that I inhabit by looking at a photograph taken from space; many people’s everyday lives are enhanced by, and unimaginable without, computers, televisions, and other electronic appliances; medicine can treat forms of illness and injury that would have brought certain death for earlier generations.

(京都大, 03)

(例えば、私は電話を取り、地球の反対側にいる親戚と話すことができ、宇宙から撮った写真を見ることによって、自分が住んでいるの

が確かに球体上であると知ることができる。コンピュータ、テレビ、その他の電子機器によって、多くの人々の日常生活の質が高められ、それらなくして日常生活は想像できない。以前の世代の人たちであれば確実に死をもたらしたであろう類の病気やけがを、医療は治療することができる)

前置詞＋名詞、不定詞、分詞構文などの副詞句がif節を代用することもある。without～やbut for～といった表現は、文法問題でも頻度が高いため、識別しやすいが、不定詞や分詞構文などが仮定条件を代用している場合は、見きわめにくくなる。助動詞[would/could/might/should]の有無と談話情報における基準となる時制を目印にして読解を進めないと誤訳につながる。(06)では、would have broughtから仮定法過去完了を予測し、for earlier generationsを条件節相当語句と捉えたいものである。

3. まとめに代えて

まず、直説法と仮定法の正確な識別(if＋SVX⇒仮定法⇒却下条件とは限らない)を前提としたうえで、eye spanの移動とともに、①文の主語、②文全体、③関係詞節、④副詞句に条件節が内在する仮定法を処理できるという項目を評価のガイドラインとして追加することができる。英文読解と言えば、センター試験に代表されるような平易でまとまりのある文を“速く”読み込む必要性が指摘されてはいるものの、高大連携の英語教育の一環として専攻分野の原書講読、さらに英字新聞読解も見据えた精読をベースとするリーディングスキルも検証しなければならない時期に来ているのではなからうか。参考までに筆者の英文読解指導の概要をまとめておく。

(京都文教中・高等学校教諭)

	高1	高2	高3
重点項目 (読解スキル)	パラグラフ「内」リーディング (文レベルの「結束性」を意識した読み)		パラグラフ「間」リーディング (scanning & skimmingなど)
コンセプト	学習ストラテジーの定着		実践解法研究＋発信型英語力の育成
ジャンル	物語・エッセイ＞ 評論	物語・エッセイ＝ 評論	物語・エッセイ＜ 評論
授業形式	キャッチボール形式(ボトムアップ)		レクチャー形式(トップダウン)
授業展開	文法訳読(70%) > 英語(30%)		文法訳読(90%) > 英語(10%)
言語材料	CROWN English Series I, II (三省堂)		入試長文演習 (難関国公立及び私大)
	PROGRESS IN ENGLISH BOOK3, 4(エディック)		
	英字新聞(MAINICHI WEEKLY)		英字新聞(The Japan Times)
	センター過去問(大問3 AB)	センター過去問(大問3 C, 4)	センター過去問(大問5, 6)
精読：速読	6 : 4	5 : 5	7 : 3
文法・語法 語彙サイズ	文法項目別インプット (解説＞演習)	文法項目別アウトプット (解説＜演習)	概念機能シラバスによるアウトプット (難関系英作文演習と個別指導)
音声指導	chunking & shadowing & dictation		予復習段階で音読
定期考査	到達度重視の作問		発展的応用問題
入試対策	英問英答(「借文」練習)	内容真偽、指示語説明など	要約、内容説明など
発展学習	多読プログラム		ディベート(背景知識強化＋論理的思考力育成)